

都市における自己家畜化

——結婚を介した「向社会性」の2重相続仮説に関する検討——

高橋征仁

新郎の母：(田舎で小さなスーパーを経営している)うちでさえ、子どもの結婚を前にあれこれと算盤を弾きましたのに、(ましてや韓国有数の大財閥である)お宅様はなおさらでしょう。我が家などは場違いも同然、(子どもたちの格差婚に対して)口惜しく思われて当然です。まあ、人の気など似た様なものですから、私も(奥様のお気持ちを)理解しているつもりです。

新婦の母：(すました顔で)ええ、理解があって幸いです。

——韓国ドラマ『涙の女王』エピソード4より；()内は筆者による補足

1. 問題の所在：経済市場としての都市、あるいは結婚市場としての都市

1.1. 「向社会性」の2重相続としての結婚

韓国ドラマ『涙の女王』は、財閥3世にあたる「デパート業界の女王」と田舎の「スーパーマーケットの王子」の結婚生活の破綻と再婚をテーマにしたラブコメディである。このドラマでは、2人の結婚をめぐる、親や兄弟、友人たちが様々な形で「算盤を弾く」シーンがしばしば登場する。2人はお互いに夢中で「ずっと一緒にいたいだけ」なのに、周囲の人々はその結婚が本当に「釣り合っている」のか、必死になって検討しようとする。

このように男女間の交際に関して、人々が「値踏み」し、「算盤を弾く」のは、はしたないことではあるが、現実の社会生活においてもよくあることであろう。「愛」を掲げ、全く打算がないような場合でも、当事者間では「算盤が合っている」からこそ、無意識のうちに、脇目を振らないようにしているだけかもしれない。しかしながら、そもそもなぜ人間は、異性との交際に対して「算盤を弾く」のだろうか？それは、一体どのような算盤で、またどのような結果を社会にもたらしているのだろうか？

言うまでもなく、結婚という取引には、経済資本や社会関係資本、文化資本だけでなく、若さや美貌、運動能力といった身体的資本—あるいは「エロティック・キャピタル」(Hakim 2012)—や、さらにはやさしさや誠実性といった人格的資本までも持ち込まれている。そうした異なる資本間の取引に関して、誰しもある程度の「算盤を弾く」ことができるのは、そこに何らかの一般的な計算可能性が成立しているからに違いない。進化心理学の観点からすれば、それは、遺伝子の自己複製(子ども、孫、ひ孫…)にどの程度貢献できるかという点から、資質的要因も環境的要因も含めて、「よりよい」次世代の継承のための資本として評価・計算していると考えられる¹⁾(Buss 1991 Ch1, 参照)。

近代以降の都市においては、そうした多種多様な資本が、制限なく自由に、最終的には

「男女間の合意」にもとづいて取り引きされる。そのため、冒頭のエピグラフで示したような社会経済的地位という点での格差婚(玉の輿や逆玉の輿)が成立する可能性が生じる。実際、明治以降の日本では、地域移動が自由化されたことによって、美人による玉の輿が急増し、上流階級の女性たちはそれを抑制するために、「美人は性格が悪い」という悪評まで流したといわれている(井上 1991, 参照)。

現在流行しているマッチングアプリでも、結婚にかかわる資本の所有状況が可視化され、網羅的に検索できるようになっており、自分の理想の条件に合う結婚相手を瞬時にリストアップすることができる。都市的環境は、このようなアプリケーション・ソフトとの組み合わせによって、個々人の性的自律性を飛躍的に増大させている。もっとも、膨大な数に及ぶ異性の情報を比較検討できるということは、結婚相手の序列化を促進し、「よりよい」相手に対する期待水準を一方向的に高めることにもつながる。したがって、そうした性的自律性の増大によって、女性の上昇婚志向は後戻りできないほど強化され、逆に「割れ鍋に綴じ蓋」のように相互に妥協しあうマッチングが困難になる(高橋 2024, 参照)。

このような都市の自由な結婚市場において、相手の性格や行動パターンにみられる「向社会性」という人格的資本は、ワンランク上の特殊な価値を有している。というのも、とくに女性からすれば、相手の財力や容姿がいかに素晴らしくても、それらが長期的に、自分や子どもたちのために費やされるのでなければ、無用の長物になるからである(Buss 1991:75)。したがって、衝動性が低く寛容で、社交的、勤勉といった「向社会性」を備えた配偶者を選択することは、将来の社会的成功という点だけでなく、円満な家庭生活や献身的サポートという点でも、非常に重要な魅力となる。多くの女性は、相手の「向社会性」を適切に見極めるために、資質的要因や環境的要因の両面にわたって慎重に検討していると考えられる。生まれてくる子どもからすれば、結婚市場におけるこうした配偶者選択は、「向社会性」の遺伝的基盤や環境的基盤を2重に相続していく最初のスタート地点であり、都市はその重要な舞台ということになる。

本稿では、このような「向社会性」の2重相続という点から、都市における結婚市場の特徴をデータに基づいて明らかにしていく。こうした検討作業は、「都市化(urbanization)」をめぐる従来の理論枠組みを補足・再構築することにもつながる。従来の都市社会学においては、主に経済市場の高度化(産業化-脱産業化)という観点から、それに順応した生活様式の変化として「都市化」が捉えられてきた。これに対して本稿では、「向社会性」をめぐる結婚市場の高次化(性淘汰の強化)という観点から、「都市化」について再考していくことにしたい。というのも、経済市場を主軸とした従来の都市社会学の視点だけでは、「都市化」をめぐる次のような重要な社会現象をうまく説明できないと考えられる。

- ①女性化：なぜ都市の主役が未婚女性であり、また都市において非婚化や少子化が深刻化しているのか？
- ②幼形化：なぜ都市の人間は、物腰が柔らかく上品であるだけでなく、顔立ちや性格、行動様式まで穏やかで、実年齢よりも若々しい人が多いのか？

③持続可能性の危機：なぜ都市は、際限のなく膨張し続け、地球の持続可能性まで危うくしているのか？

これらの現象は、それぞれ別々の事柄ではなく、「向社会性」にもとづいて配偶者選択を行うことで生じる「自己家畜化」という遺伝的・生理的メカニズムに関連していると考えられる (Wilkins et al 2014, Wrangham 2017, Hare & Woods 2020, 参照)。文明による自然や衝動性の抑制という社会化・社会統制の圧力は、配偶者選択の局面においても大きく影響し、それが遺伝的・生理的プロセスとしての「自己家畜化」をもたらしているというのが本稿の基本的主張である。

以下では、これらの問題点について、それぞれ簡潔に説明しておくことにしたい。

1.2. 女性化：都市の空気はく女性を>自由にする

まず1つ目の①女性化に関していえば、従来の都市社会学では、主として男性労働力の都市移動という観点から議論が展開されてきた。「都市の空気は(人を)自由にする」(Stadt Luftmachtfrei)という言葉は、その典型ともいえるだろう。この言葉は、都市に逃亡した農奴などが一定期間を経過することで自由民になることができた中世ドイツの法律に由来しており、都市のもつ革新性や創造性、奢侈などを象徴する言葉として、都市社会学の中心的テーマとなってきた。都市における人口の集積が、社会関係やパーソナリティに質的变化をもたらす創発的的局面については、このような職業的自由や分業の進展にもとづく経済市場の複雑化と高次化—産業化と脱産業化—や、それに伴う道徳や行動様式の文化的変容という観点から考察されてきた。

シカゴ学派の都市社会学者 R.パークは、このプロセスを次のように説明している。

人間は、あらゆる情熱や本能、欲求を制御されずに、規律化されないままこの世に生まれてくるということは事実のようだ。しかし、文明は、共通の福祉のために、これらの荒々しい自然の欲求性を常に制御し、時には抑圧することを要求する。個人に規律を課す過程、すなわちコミュニティが承認するモデルに従って個人を作り変える過程で、多くのことが完全に抑制され、さらに多くのことが社会的に有用な形や少なくとも無害な形で、代替的に表出される。スポーツや遊び、芸術が機能するのは、まさにこの点である。これらの活動では、野性的でありながらも抑制された衝動性を象徴的に表出することで、自分自身を浄化することができる (Park 1925:43 ; 訳文と強調は筆者による)。

ここでパークが指摘しているように、都市が個々人に課す基本的制約は、自然⇄衝動性の抑制とその代替的表出であり、そうした傾向は、地方より都市のほうが一層強いということは、十分納得のいくことである。人口密度が高く、複雑で多様な都市生活では、外向性や勤勉性、寛容さ(無関心さ)などの点で、「向社会性」性の高い性格や行動が求められる。そのために、都市では、より強力な社会化や社会統制のメカニズムが働いていることは間違いない。都市生活に不可欠な、朝夕の満員電車も長い待ち行列も、目まぐるしく

変化する流行も、地方で生まれ育った人間には、とても耐えきれないものがある。

しかし、若年女性の都市移動が止まらないことからわかるように、現代の都市が「自由な空気」を与えているのは、基本的に、「未婚女性」に対してであって、「男性労働者」に対してではない。都市は、「男らしさ」や「猛々しさ」、「老い」を嫌悪し、都市が提供する様々な利便性も、圧倒的に女性に向けられたものが多い。こうした都市の女性化現象は、産業化から脱産業化への構造転換に伴う結果とみなされることが多いが、逆にその原因と考える論者も少なくない。たとえば、W.ゾンバルト『恋愛と贅沢と資本主義』（1912）やG.ジンメル「コケットリー」（1911）、N.ルーマン『情熱としての愛』などの考察には、セクシャリティや恋愛、結婚など男女関係の変化のほうが、近代の都市形成や産業化に時間的に先行し、その母胎となったという指摘がみられる（鈴木訳編 1965, 参照）。

さらに言えば、C.ダーウィンの『人間の由来と性淘汰』（1871）は、タイトルの通り、人間進化という系統発生のプロセスを、『種の起源』で示した「自然淘汰」ではなく、「性淘汰」の原理（配偶者選択）によって説明しようとした晩年の野心作である。ダーウィンによれば、「性淘汰」とは「繁殖との関連のみにおいて、ある個体が同種に属する同性の他の個体よりも有利に立つことから生じる淘汰」（Darwin1971=2016:310）である。このプロセスは、オス同士の雄間競争とメスの選り好みから成り立っており、ダーウィンは、ほとんどの生物において、見かけ上、受動的であるメスが選り好みを行うことで、オスの身体装飾が形成されることを見出している²⁾。たとえば、クジャクの尾羽やシカの角の身体装飾は、第2次性徴以降のオスにのみみられ、遺伝を通じて次世代のオスに継承される。

人間の場合でも同様に、女性が男性を選り好みし、「よりよい」次世代の形質とりわけ「向社会性」の獲得と相続を目指して都市流入しているとしたらどうだろうか？もちろん、人間の場合は、男性も女性を選り好みしているが、お互いの総資本に圧倒的な格差がないかぎり、最終的な決定権は女性の側にあるとみてよいだろう。アメリカ大統領や映画スターですら、自分の選り好みを思い通りに実行することはできないだろう。このように「向社会性」の次世代相続という潜在的課題を仮定すると、未婚女性の都市流入が抑制できないこと、それによって未婚率や出生率の分母が増え、数値が低下し続けていること、さらには選り好み強化され、結婚のハードルが上がることなど、少子化・非婚化をめぐる一連の難問に対して、合理的な説明がつくことになる。こうした点で、経済市場（男性の雄間競争）だけでなく、結婚市場での配偶者選択の点から「都市化」を再考する必要がある。

1.3. 幼形化：「向社会性」にもとづく配偶者選択は、幼形化（家畜化）を引き起こす

また、都市の住人は、物腰が柔らかく上品であるだけでなく、顔立ちや性格、行動様式まで穏やかで忍耐強く、実年齢よりも若々しい人が多い。いったいなぜだろうか？農作業など肉体労働の有無だけが、そうした形態的・生理的な違いをもたらしているのだろうか？それとも、こうした認識は、たんなる偏見やコンプレックスの裏返しにすぎないのだろうか？「都市化」に関する従来議論では、先のパークの主張にみられるように、都市住人

の心理的・行動的特徴は、複雑で密集した都市的環境への順応の結果であると考えられてきた。しかし、「人間は、あらゆる情熱や本能、欲求を制御されずに（中略）、この世に生まれてくる」（Park 1925:43）とする仮定がそもそも誤りだとしたらどうだろうか？全員が同じ数の子どもを持つわけではないから、子どもを持つ者と持たない者の間に遺伝的差異が存在すれば、当然、その差が次世代の遺伝的バリエーションにも反映されることになる（Zuk2013,参照）。「向社会性」の高い相手を配偶者として選択すれば、次世代では、衝動性が低く、「向社会性」の高い者が増加することになる。

このように「向社会性」の高い相手を配偶者として選択することは、進化生物学や進化人類学の観点からすると、「自己家畜化(self domestication)」を引き起こす性淘汰であり、人間と家畜動物とに共通する「家畜化症候群 (domestication syndrome)」を発生させる（Wilkins 2017, Wrangham 2019, Hare & Woods 2020）。すなわち、「向社会性」の高い個体を選択することによって、従順かつ依存的で、学習能力の高い、より「向社会的」な、遺伝的・生理的基盤を持つ個体が増加するという。このような「家畜化症候群」のリストには、従順性の高さ（≒衝動性の低さ）をはじめ、色素脱失や顔の平板化（眉弓・頬弓骨の低下、吻部縮小）、脳の縮小、歯の縮小、性的 2 型の縮小、繁殖周期の短期化、遊び行動、学習行動など、形態的・生理的・心理的・行動的次元にわたる特徴が含まれる。その中心的特徴は、幼形化（pedomorphosis）—発生・発達の開始が遅れ、ピークが停滞し、早期完了すること—にあるとされる。

この「家畜化症候群」をめぐっては、様々な次元の形質が、種の違いを超えて収斂進化するメカニズムが、長い間わからなかったため、漠然と人間社会への適応の結果として説明されてきた。これに対して、ロシアの遺伝学者 D.ベリャーエフ（1917-1985）らは、人間が扱いやすい従順な家畜だけを選択的に殖やしてきた点に、その鍵があることを突き止めた。彼らは、衝動性の低いキツネだけを選択的に交配されるだけで、一連の家畜化症候群が副次的に発生し、まるで犬のような友好的なキツネ（家畜種）が生まれてくることを実証した（Dugatkin and Trut 2017）。さらに、ドイツの遺伝学者 A.ウィルキンスらは、衝動性の低い個体を交配することは、「神経堤細胞 (neural crest)」の少ない個体を選択することになり、それによって、副腎や交感神経節などのストレス応答が緩やかになるとともに、色素細胞や骨芽細胞、軟骨細胞などが減少するために、一連の形態的・生理的変化が生じるとする「神経堤細胞仮説」を提起している（Wilkins et al 2014, Wilkins 2017）。

これらの新しい自己家畜化論における重要な知見は、性淘汰による遺伝的・生理的基盤の変更（従順化）を伴う「家畜化」と、「飼い慣らし」や「囲い込み」による訓練・学習とを明確に区別した点である。R.ランガムは、この違いを次のように指摘している。

オオカミは犬とは違う。どんなにオオカミを飼い慣らしても、家畜化されることはなく、長年従順であっても突然、なんの前触れもなく訓練を忘れることがある。野生動物は反応的攻撃性が非常に強いので信用すべきではないが、家畜化された動物は遺伝的に野生の祖先から変化してきたので、単純な刺激では反応的攻撃をしない・・・問題

はどれだけ学習能力があるかではない……私たちが信頼関係を築くことができるのは、家畜化された動物だけなのだ (Wrangham 2019:47-48 強調と訳文は筆者による)。

つまり、家畜動物は、性淘汰を通じて遺伝的・生理的に衝動性が低下(家畜化)しているからこそ、様々な訓練や学習が可能になっているのであり、この両者の因果関係を混同してはならない。同様のことが、人間の都市生活に関しても、あてはまるだろう。都市の社会化や社会統制によって衝動性が抑制される側面だけでなく、配偶者選択を通じた遺伝的・生理的基盤が更新される側面にも、目を向ける必要があるだろう。

もっとも、日本では、平安時代から、「引目鉤鼻」の貴族顔と、ゴツゴツした武者顔、あるいは僧侶、町人の顔など、身分によってそれぞれ異なる形態的特徴を持つことがよく知られていた。また、人類学者の鈴木尚(1985)は、江戸時代の徳川将軍家の頭蓋骨を調べることで、無骨な戦国武将の顔が数世代のうちに「貴族化」していることを明らかにしている。彼はその原因として、食生活の変化と配偶者選択の2つを指摘していたが、後者の側面からの実証的研究はほとんど展開されてこなかった。しかし、食生活による顔の変化が話題になった1990年代から現在までの30年間、日本人の食生活に大きな変化は見られないが、男性の平均顔の幼形化は、いまも急激に進行している(高橋 2025a, 参照)。

このようにしてみると、自然や衝動の抑制という文化的適応としての「都市化」は、配偶者選択(性淘汰)による遺伝的・生理的基盤の変化(自己家畜化)という側面からも、あわせて検討していく必要があると思われる。都市生活が個々人に要求する「向社会性」は、教育や就職などの社会的選抜において重要な特性であるだけでなく、結婚・出産・養育という配偶者選択の局面でも強く作用しており、このことが人間の遺伝的・生理的基盤を「向社会性」の高いタイプへと更新し続けていると考えられる。本稿では、このようにして、人間の「向社会性」が文化的側面と生物学的側面の両面にわたって2重に相続されているプロセスに着目している³⁾。

1.4. 持続可能性の危機：家畜化・栽培化による「人新世」の発展と危機

最後に、地球の持続可能性という問題についても触れておくことにしたい。人間(ホモ・サピエンス)が狩猟採集生活から定住生活に移行し、農耕や牧畜(栽培化・家畜化)を始めたのがおよそ1万年前、西アジア地域に都市が誕生したのが7000~6000年前であると考えられている。それから都市は、指数関数的に膨張し続け、現在では、世界人口の約55%程度が大小の都市に暮らし、「都市化率」は2050年までに70%近くに達すると見られている(国連広報センター 2020)。このような都市の急激な発展は、わずか300~400世代の間に行われており、たんなる都市的生活様式の伝承や蓄積という足し算だけで説明できるとは思えない。なぜ、このような加速度的な変化が続いているのであろうか？

自己家畜化論の観点からすれば、衝動性が低く、従順性の高い配偶相手が選択され、世代間で遺伝的に継承されるために、脆弱でありながらも、より「向社会的」で学習能力の高い人間へと「進化」(世代間での遺伝子比率の変化)してきたと考えられる。そうした遺

伝的变化によって、都市の文化は、衝動を抑制した、より繊細で寛容な文化へと発展し続けていると捉えられる。このような形で、「遺伝子→文化」と「文化→遺伝子」という双方向の影響関係にもとづく理論は、「2重相続理論」(Boyd & Richerson 1985)や「文化-遺伝子共進化理論」(Henrich 2015)と呼ばれている。都市の急激な膨張と高次化を説明するためには、このような文化と遺伝子の2重相続や共進化という掛け算のメカニズムが不可欠であると考えられる。

このように考えると、広い意味での「都市化」とは、人間が身の回りの自然を改変して家畜化・栽培化するプロセスだけでなく、人間が自分たち自身をより「向社会性」の高い存在として、遺伝的に書き換えていくプロセスも伴っていることになる。小麦や米を栽培したり、牛や豚を家畜化したりするプロセスにおいて、人間もまた、そうした生産労働や消費活動に適した存在として、性淘汰を通じて選択されてきたはずである。このようにしてみると、1950年代の社会心理学における「文化とパーソナリティ」という理論枠組みは、配偶者選択による性淘汰を媒介とした社会変動の理論として再構築できると考えられる。

もともと、このような「向社会性」をめぐる2重相続のプロセスが、人間社会の「進歩」を意味するものとして肯定的に評価できるプロセスであるかどうかは、まだ不確かである。というのも、「人新世 (Anthropocene)」という言葉に示されるように、自然を統制する人間の活動は、地球の生物多様性や生態系にまで深く影響し、その持続可能性を危うくしているからである。本稿での見解によれば、そうした自然を統制するプロセスは、人間が素朴な知識を用いて他の動植物の生殖活動に介入しはじめた1万年前に始まり、19世紀の性愛の自由化によって大きく加速してきたことになる。そうした変化のペースは、地球環境という点でも人間の形質という点でも極めて速く、現在では、1世代どころか、おそらく10年単位でもその違いを観察できる(高橋 2025a, 参照)。ただし、天動説同様、自己中心性バイアスが作用するため、多くの人々は人間の激変を認めようとはしないだろう。

本稿では、以上の3つの問題関心に基づいて、「向社会性」の2重相続に着目しながら、都市における配偶者選択のあり方を明らかにしていく。

2. 研究方法—山口県・福岡県・東京都における配偶者選好に関する調査研究

2.1. 仮説と使用する質問項目

本稿で使用するデータは、「山口県と福岡県、東京都における結婚相手選びに関する調査研究」(山口大学人一般研究倫理審査委員会、管理番号:2023-058-01)から得られたものである。この調査の主目的である山口県と福岡県、東京都の3都県における結婚市場の比較については、すでに別稿において分析を行っている(高橋 2025b)。本稿では、都市における「向社会性」の2重相続という観点から、「大都市」(東京23区と福岡市の居住者)と「地方」(それ以外の市町村の居住者)に分けて、配偶者選択のあり方を比較検討していくことにする。これまで述べてきたように、都市の結婚市場において、「向社会性」の2重相続が行われているとすれば、およそ次のような知見を見出せるだろう。

- ①「大都市」では、「地方」よりも女性の「上昇婚志向」が強い。ただし、この「上昇婚志向」は、出身家庭の生活水準の高さや社会的地位の代理達成願望から来るものではなく、将来「子どもに与えたい生活水準」を先取りするものである。
- ②「大都市」では「地方」よりも、「向社会性」に対する女性の選り好みも強い。
- ③その結果、結婚している男性では、結婚していない男性に比べ、「向社会性」が高い。この「向社会性」は、階層や学歴だけでなく、「大都市」出身や親の出身地、親の配偶者選択（恋愛結婚）の影響を受けている。

本稿では、これらの仮説を検討するために、次のような質問項目を用いている。

- A【居住地】：調査協力者が登録している居住地情報をもとに、「大都市」（東京 23 区と福岡市の居住者）と「地方」（それ以外の市町村の居住者）に 2 分した。
- B【出身地】：「私/父親/母親は都会の出身である」への回答（5 件法：あてはまる～あてはまらない）。さらに、A【居住地】との組み合わせで、地域移動の 4 類型を作成している。A の「大都市」居住者で、かつ「私」が「都会出身」に「あてはまる」者を「大都市定住者」、それ以外の者を「大都市移住者」とした。同様に、A の「地方」居住者のうち、「私」が「都会出身」に「あてはまる」者を「地方移住者」、それ以外の者を「地方定住者」とした。
- C【基本属性】：「性別」、「年齢」（20-39）、「婚姻関係の有無」（1/0）、「大卒以上か否か」（1/0）、「フルタイム就労」の有無（1/0）、「親は恋愛結婚か否か」（1/0）。
- D【上昇婚志向】とその他の生活水準についての 5 段階評価：「現在の自分の生活水準」、「自分の親の生活水準」、「結婚相手に期待する生活水準」（＝上昇婚志向）、「独身の場合に希望する生活水準」、「将来、子どもに与えたい生活水準」（＝子どもへの投資意向）の 5 項目について、上・中の上・中・中の下・下の 5 段階の回答。
- E【結婚条件の重視度】：「顔が魅力的」、「高い経済力が見込める」、「学歴が高い」、「スタイルが魅力的」、「運動神経がよい」、「家事や育児を行ってくれる」、「安定した職業につく見込みが高い」、「見た目が若く健康的」、「浮気をしない」、「穏やかな性格」の 10 項目について、「かなり重視する」～「全く重視しない」の 5 件法の回答。
- F【結婚条件への自信度】：上記 10 項目の条件について、自分自身が「あてはまる」のか「あてはまらない」のかの 5 件法で回答。
- G【絶対に譲れない結婚条件】：「年収 400 万円以上」、「大学卒業以上の学歴」、「太っていない（BMI25 未満）」、「顔が人並み以上」、「現在の住所よりも田舎には引っ越さない」、「子どもが好き」、「相手の親と同居しない」、「清潔感がある」、「めったに怒らない」の 9 項目について、「絶対に譲れない」、「多少妥協してもよい」、「あまり気にしない」から回答。また、「絶対に譲れない」とした項目数も得点化して用いた。
- H【簡易版ビッグファイブ】：正逆 2 項目の質問文 4) に対する 7 件法の回答を合計して、「開放性」、「勤勉性」、「外向性」、「協調性」、「神経症傾向」（2-14）の各得点を求めた。

2.2. 調査協力者とデータ・クリーニング

この調査では、GMO リサーチ運営の Japan Cloud Panel のモニター登録者に配信して、回答者を集めるサービスを利用している。表 1 のように、モニター登録者数や費用などを勘案して、山口県・福岡県・東京都の 3 都県に住む 20-39 歳男性 500 人、女性 1,000 人を調査協力者として設定した。

表 1. 調査協力者の設計数と回収数、および有効票数

	山口県			福岡県			東京都			全体
	設定	回収	有効	設定	回収	有効	設定	回収	有効	有効
女性 20歳代	70	78	55	215	238	174	200	222	163	392
30歳代	100	112	84	215	239	190	200	224	188	462
男性 20歳代	30	36	24	110	122	69	100	110	63	156
30歳代	50	61	38	110	123	80	100	117	80	198
合計	250	287	201	650	722	513	600	673	494	1208

調査票の配信は、2023 年 11 月 10～14 日の 5 日間行われ、1,682 票が回収された。ただし、WEB 調査の問題点として、できるだけ短い時間で効率的に報酬（ポイント）を得ようとする調査協力者の「手抜き回答」が指摘されている（三浦・小林 2015）。そこで本研究では、a 回答時間 5 分未満の 205 ケース、b 読み飛ばしチェックに複数回誤答した 219 ケース、c 同じ回答を続けるなど反応性の低い 106 ケース、d 配偶関係や交際経験などの回答に矛盾が見られた 176 ケース、累計 474 ケースを除外した。最終的な有効票数は、1,208 ケースである。これらの調査協力者について、本稿では、東京 23 区と福岡市に居住している者を「大都市」居住者、それ以外の者を「地方」居住者としている。それぞれの居住地ごとにみた有効票数は、表 2 のとおりである。

表 2. 大都市／地方の区分でみた有効票数

	大都市		地方	全体
	設定	回収	有効	有効
女性 20歳代	180	212	392	392
30歳代	206	256	462	462
男性 20歳代	72	84	156	156
30歳代	83	115	198	198
合計	541	667	1208	1208

表 3. 地域・年代グループごとの既婚者割合%

		既婚者割合%		
		大都市	地方	全体
女性	20歳代	20.0	18.9	19.4
	30歳代	46.1	53.1	50.0
男性	20歳代	8.3	14.3	11.5
	30歳代	31.3	31.3	31.3

また、それぞれの居住地・性別・年代のグループごとに、現在、結婚している者の割合（離死別者を除く）を表 3 に示している。『人口動態統計』（厚労省 2024）によると、東京都の平均初婚年齢は、夫 32.3 歳、妻 30.7 歳で福岡県や山口県よりも 1~2 歳程度遅いとされているが、このデータセットに関していえば、「大都市」と「地方」の間で、既婚者割合に統計的な違いはみられなかった。

なお、本稿でのデータ分析には、IBM SPSS Statistics ver.30.0 を使用している。

3. 結果—①「上昇婚志向」、②「向社会性」の選り好み、③ビッグファイブの世代間相続

3.1. 「大都市」では、「地方」よりも女性の「上昇婚志向」が強い

最初に、「上昇婚志向」を含む生活水準に関する各項目について、性別ごとに地域間での平均値比較を行った。表4によると、「結婚相手に希望する生活水準」(上昇婚志向)は、男性に比べ女性でかなり高く、女性全体の「上昇婚志向」が強い。そのうえ、「大都市」女性の方が、「地方」女性よりも、若干平均値が高くなっている。男性では、そうした地域差は見られなかった。

表4. 5段階でみた生活水準(上昇婚志向)に関する地域別平均値の比較

	女性の平均値とt値			男性の平均値とt値		
	大都市 (386)	地方 (468)	t値	大都市 (155)	地方 (199)	t値
自分の現在の生活水準	2.78	2.60	2.70 **	2.65	2.51	1.40
自分の親の生活水準	3.13	2.93	3.09 **	2.97	2.88	.94
結婚相手に希望する生活水準(上昇婚志向)	3.47	3.38	2.12 *	3.05	3.13	-1.01
独身の場合に希望する生活水準	3.15	3.11	.76	3.14	3.16	-.24
子どもに与えたい生活水準	3.58	3.57	.12	3.50	3.48	.18
現在の幸福感の水準	3.06	3.05	.05	2.77	2.83	-.56

** p<.01, * p<.05

このような女性の地域差は、「自分の現在の生活水準」や「自分の親の生活水準」に関してもみられるため、これらの生活水準の地域差が、「大都市」女性の「上昇婚志向」の原因であるようにも見える。しかし、進化心理学の観点からすれば、「上昇婚志向」は、過去や現在の生活水準よりも、むしろ将来の「子どもへの投資水準」にあると考えられる。このことを明らかにするために、表5では、「上昇婚志向」と他の生活水準の関連について、結婚の有無を統制した偏相関係数を求めた。

この表5によると、「結婚相手に希望する生活水準」(上昇婚志向)と最も強い関連がみられるのは、女性においては、自分や親の生活水準ではなく、「子どもに与えたい生活水準」である。このことから、女性における「上昇婚志向」の強さは、自分の生活水準の維持や向上への願望から来るものではなく、「子どもに与えたい生活水準」を、無意識のうちに、先取りしたものと考えられる。また、そうした傾向は、「地方」女性よりも「大都市」女性において一層顕著であることから、「大都市」ほど、子どもへの投資傾向と「上昇婚志向」が強く結びついている。

表5. 結婚相手に求める生活水準(上昇婚志向)と他の生活水準の偏相関係数(統制変数=結婚)

	女性		男性	
	大都市 (386)	地方 (468)	大都市 (155)	地方 (199)
自分の現在の生活水準	.280 ***	.214 ***	.165 *	.284 ***
自分の親の生活水準	.251 ***	.237 ***	.114	.185 **
独身の場合に希望する生活水準	.394 ***	.331 ***	.357 ***	.395 ***
子どもに与えたい生活水準	.561 ***	.418 ***	.274 ***	.420 ***

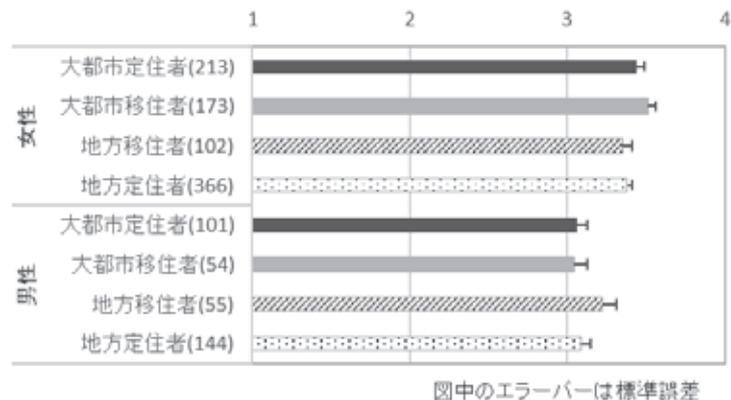


図1. 地域移動の4類型ごとにみた「上昇婚志向」の平均値

さらに、図1では、地域移動の4類型ごとに、「結婚相手に希望する生活水準」（上昇婚志向）の平均値を示している。この図によると、女性の「上昇婚志向」は「大都市移住者」で最も高く、「地方移住者」で最も低い。ただし、「大都市定住者」と「大都市移住者」、「地方定住者」と「地方移住者」との間には、男女とも統計的な有意差はみられなかった。

3.2. 「大都市」では、「地方」よりも「向社会性」に対する女性の選り好みが強

次に、10項目からなる結婚条件の重視度について、検討しよう。これらの項目は、因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果、「家庭性」因子、「地位」因子、「外見」因子の3因子が抽出された（図表略）。そこで、表6では、10項目を3つのグループにわけて、性別ごとに地域差を示している。表6によると、「大都市」の女性では、「地方」の女性よりも、「穏やかな性格」や「学歴が高い」ことを重視する傾向が見られた。逆に、「地方」の女性では、「家事や育児を行ってくれる」や「運動神経がよい」を重視する傾向が見られた。男性では、「結婚条件の重視度」について、統計的に有意な地域差は見られなかった。

女性の地域差も、決して大きいものではないが、2つの点に注意しておく必要がある。1つには「家庭性」に関する重視度はほとんどの者が「5 かなり重視する」を選択しているために、天井効果が見られること、もう1つには、こうした評価が、調査協力者個々人内

表6. 結婚条件の重視度に関する性別・地域別の平均値

グループ		女性の平均値とt値			男性の平均値とt値		
		大都市 (386)	地方 (468)	t値	大都市 (155)	地方 (199)	t値
家庭性	浮気をしないこと	4.53	4.53	.03	4.28	4.19	.98
	穏やかな性格であること	4.51	4.41	1.95 †	4.20	4.17	.34
	家事や育児を行ってくれること	4.18	4.32	-2.33 *	3.74	3.84	-.96
地位	安定した職業につく見込みが高いこと	4.08	4.11	-.48	3.39	3.25	1.24
	高い経済力が見込めること	3.77	3.68	1.47	3.05	3.05	.05
	学歴が高いこと	2.77	2.59	2.31 *	2.35	2.30	.42
外見	顔が魅力的なこと	3.54	3.52	.19	3.75	3.89	-1.45
	スタイルが魅力的なこと	3.16	3.18	-.28	3.39	3.51	-1.10
	見た目が若いこと	3.02	3.09	-.97	3.37	3.54	-1.58
	運動神経がよいこと	2.53	2.68	-2.02 *	2.34	2.41	-.58

* p<.05, † p<.10

表7. 結婚条件への自信度に関する性別・地域別の平均値

グループ		女性の平均値とt値			男性の平均値とt値		
		大都市	地方	t値	大都市	地方	t値
		(386)	(468)		(155)	(199)	
家庭性	浮気をしないほうである	4.37	4.36	.19	4.19	4.05	1.39
	性格は穏やかなほうである	3.52	3.27	2.98 **	3.81	3.71	.93
	家事や育児を行うほうである	4.00	4.03	-.40	3.74	3.61	1.17
地位	安定した職業につく見込みが高いこと	2.87	2.84	.30	2.96	3.15	-1.32
	高い経済力が見込めるほうである	2.31	2.25	.70	2.65	2.50	1.13
	学歴が高いほうである	2.74	2.44	3.38 ***	2.57	2.65	-58
外見	顔は魅力的なほうである	2.82	2.55	3.32 ***	2.61	2.62	-.04
	スタイルは魅力的なほうである	2.54	2.43	1.31	2.62	2.64	-.15
	見た目が若いほうである	3.66	3.40	3.36 ***	3.28	3.21	-.56
	運動神経はよいほうである	2.48	2.45	.34	2.91	2.98	-.56

*** p<.001, **p<.01

での相対評価になっているという点である。そのため、女性の選り好みについては、さらに、「結婚条件への自信度」や「絶対に譲れない結婚条件」からも検討した。

表7の「結婚条件への自信度」によると、「大都市」女性では、「地方」女性に比べ「性格は穏やか」や「学歴が高い」について、「あてはまる」と回答した割合がかなり高い。加えて、「顔は魅力的」や「見た目が若い」についても、「大都市」女性では肯定する割合が高い。こうした地域差は、男性では全く見られなかった。このことから「大都市」女性では、結婚条件に自信のある者が多く、配偶者選択のハードルもかなり高いと考えられる。

また、結婚に関する具体的な条件を挙げて、「絶対に譲れない」かどうかを尋ねた場合にも、「大都市」女性と「地方」女性との選り好みの違いが鮮明であった。表8は、「年収400万円以上」などの具体的な結婚条件について、「絶対に譲れない」と回答した者の割合を示している（「多少妥協してもよい」と「あまり気にしない」の回答率は省略）。この表によると、ほとんどの項目に関して、男性より女性が「絶対に譲れない」としている割合が高いだけでなく、「大都市」女性と「地方」女性の間でも、大きな違いが見られた。

このうち「地方」女性の回答率が高い項目は「子どもが好き」だけであり、「清潔感がある」や「年収400万円以上」、「大卒以上の学歴」、「顔が人並み以上」に関しては、いずれも「大都市」女性の回答率が高くなっていた。男性ではこうした地域差はほとんど見られない。「大都市」女性の選り好みの強さは、「年収」や「学歴」などの社会経済的地位だけでなく、「清潔感」や「顔が人並み以上」の点にも及んでいることがわかる。ただし、「めったに怒らない」については、性差は顕著であるが、地域差はあまり大きくなかった。

表8. 「絶対に譲れない結婚条件」とした回答率%についての性別・地域別比較

	女性			男性		
	大都市	地方	χ ² 値	大都市	地方	χ ² 値
	(384)	(466)		(154)	(197)	
9清潔感がある	69.5	60.5	7.5 *	46.8	39.6	5.7
8相手の親と同居しない	65.9	63.3	4.3	34.4	37.1	1.8
10めったに怒らない	55.2	51.9	3.5	27.3	26.4	2.4
1年収400万円以上	48.2	36.3	12.6 ***	10.4	6.1	3.4
4子どもが好き	29.7	39.5	19.2 ***	24.0	22.3	0.2
6現在の住所よりも田舎には引っ越さない	25.3	20.6	4.4	14.9	9.6	2.7
4太っていない(BMI25未満)	24.7	20.8	2.4	26.6	22.8	1.5
2大学卒業以上の学歴	24.2	10.5	34.3 ***	5.8	4.6	0.9
5顔が人並み以上	18.2	12.2	6.1 *	20.1	21.8	0.2

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

表中の数字は質問順を示す。「大都市」女性の回答率が高い順に並び替えている。

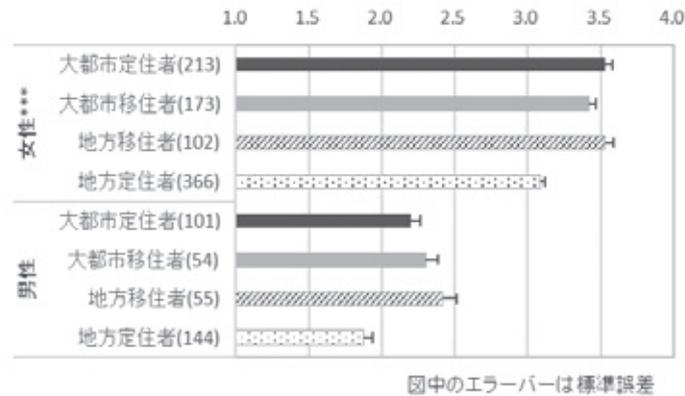


図2. 地域移動の4類型ごとにみた「絶対に譲れない結婚条件」の平均項目数

さらに、図2では、「絶対に譲れない結婚条件」として挙げた項目数について、地域移動の4類型ごとに平均値を示している。この図によると、「絶対に譲れない結婚条件」の項目数は、男女で大きな違いがあるだけでなく、女性では地域移動の類型によっても大きく異なっていることが分かった。すなわち、「地方定住者」では、強い選り好みと比較的少ないのに対して、「大都市移住者」も「地方移住者」も、ともに「大都市定住者」と同程度の選り好みをしていることが明らかとなった。このことから、「大都市」居住によって女性の選り好み強化されるだけでなく、学歴や外見、性格などの結婚条件に自信のある女性から「大都市」に地域移動していると推測できる。

3.3. ビッグファイブ得点からみた「向社会性」の選り好みと2重相続

最後に、簡易版ビッグファイブ得点を用いて、こうした配偶者選択の結果を検討しよう。図3に示したのは、性別・地域別のグループごとに、配偶者の有無によるビッグファイブ得点の平均を比較した結果である。「大都市」女性（図3a）では配偶者の有無による得点差がほとんど見られないのに対し、「地方」女性（図3b）と「大都市」男性（図3c）、「地方」男性（図3d）では、かなり大きな差が見られた。結婚している人においては、「神経症傾向」が低く（≒寛容度が高く）、「勤勉性」や「外向性」が高い傾向が見られた。「協調性」については、顕著な差が見られなかった。

ここまで検討してきた女性の選り好み傾向からすると、こうした男性のビッグファイブ得点の違いは、女性の「向社会性」への選り好みを反映した結果と考えられる⁵⁾。そこで、これらのビッグファイブ得点は、実際に結婚と関連しているといえるのか、「配偶者の有無」を従属変数として、「年齢」と{学歴}、「ビッグファイブ得点」を独立変数として2項ロジスティック回帰分析を行った。

表9によると、「大都市」女性では、「ビッグファイブ得点」と「配偶者の有無」の関連は全く見られない。それに対して、「地方」女性と男性では、「外向性」が高いことが、結婚と関連している。また「大都市」でも「地方」でも男性においては、「開放性」が低いこ

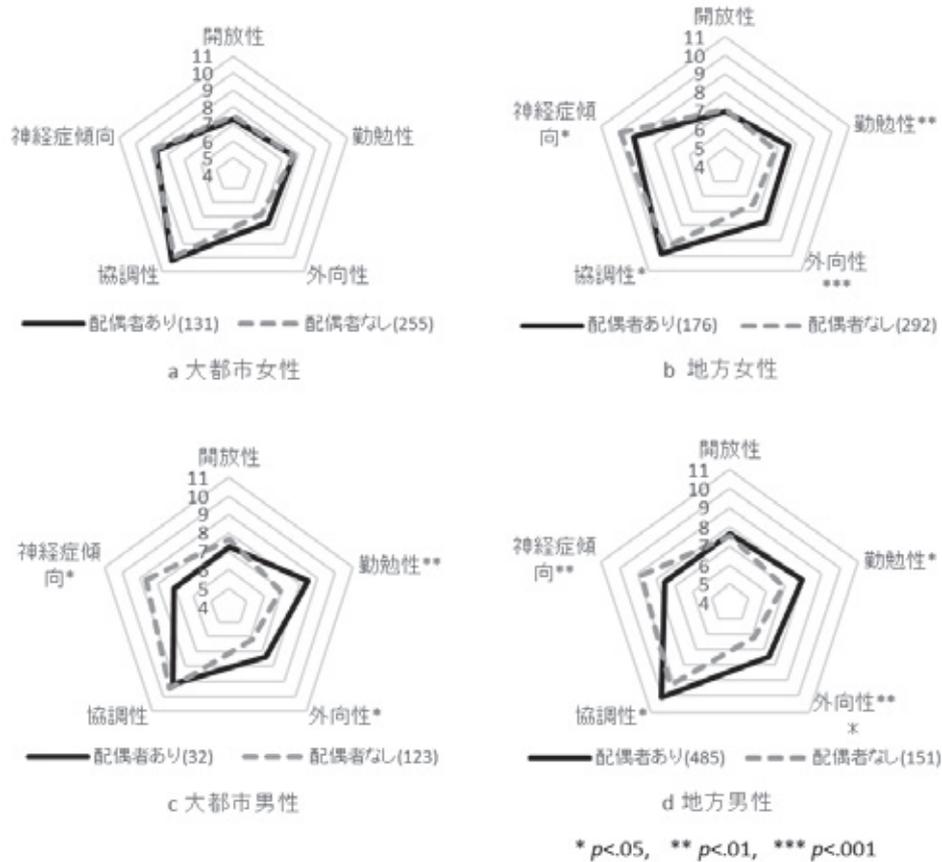


図3. 「配偶者の有無」による「ビッグファイブ得点」の違い

表9. 「配偶者の有無」を従属変数とした2項ロジスティック分析の結果

	大都市女性 (結婚n=131)		地方女性 (結婚n=176)		大都市男性 (結婚n=32)		地方男性 (結婚n=48)	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
年齢	.144	1.154 ***	.147	1.158 ***	.180	1.197 **	.158	1.171 ***
大卒以上の学歴(0-1)	.314	1.368	-.516	.597 *	1.507	4.512 *	.543	1.721
開放性	-.050	.951	-.070	.933	-.292	.747 **	-.194	.823 *
勤勉性	-.074	.929	.072	1.075	.102	1.108	-.083	.920
外向性	.053	1.054	.146	1.157 ***	.336	1.399 **	.319	1.376 ***
協調性	.013	1.013	.101	1.106	-.166	.847	.236	1.267 *
神経症傾向	-.023	.978	-.024	.976	-.137	.872	-.188	.829 *
-2 対数尤度		177.024		110.910		525.634		445.734
Cox-Snell R2 乗		.194		.261		.182		.119
Nagelkerke R2 乗		.290		.409		.248		.164
χ^2		48.826		94.098		46.948		42.857
N		386		468		155		199

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

とが結婚と関連していた。さらに、「地方」男性では、「協調性」が高いことや「神経症傾向」が低いことも、結婚と関連していた。ここでは、「年齢」と「学歴」を投入したため、「勤勉性」のよる影響は確認できなくなっていた。

他方、こうした「ビッグファイブ得点」は、どのような要因によって影響されているの

表10. 「ビッグファイブ得点」を従属変数とした重回帰分析の結果

	開放性		勤勉性		外向性		協調性		神経症傾向	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
年齢	-.072	-.040	.048	.157 ***	-.063	.064 †	-.144 **	.025	.010	-.053
大都市居住(0-1)	-.039	.035	-.008	.051	-.067	-.016	.005	.049	-.003	-.128 ***
父親は都会出身(1-5)	.122 *	.064 †	.098 †	.111 **	.113 *	.064 †	-.069	-.007	-.105	-.058
親は恋愛結婚(0-1)	.094 †	.045	.126 *	.088 *	.119 *	.074 *	.222 ***	.098 **	-.096 †	-.064 †
調整済みR ²	.020 *	.006 †	.018 *	.043 ***	.023 *	.007 *	.064 ***	.007 †	.011	.026 **
N	334	774	334	774	334	774	334	774	334	774

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, † p<.10

であろうか？行動遺伝学における双生児研究によれば、「ビッグファイブ得点」のおよそ4割から5割程度のばらつきは、「遺伝」に関連したものとして説明できるという(Ando et al 2004)。ただし、この調査では直接「遺伝」に関する情報は収集していないため、ここでは、父親の出身に関する情報を用いて重回帰分析を行った(調査協力者や母親の出身は、関連が見られなかったため除外している)。

表10によると、調査協力者の「ビッグファイブ得点」に関しては、本人の「大都市居住」よりも、「父親は都会出身」であることや「親は恋愛結婚である」ことが広範囲で影響を与えている。「父親は都会出身」については、「開放性」や「勤勉性」、「外向性」と正の関連が見られる。また、「親は恋愛結婚」は、「開放性」や「勤勉性」、「外向性」、「協調性」と正の関連が、「神経症傾向」とは負の関連が見られた。今回の調査では、「協調性」の平均値がかなり高く、配偶者の有無による違いは見られなかったものの、「親は恋愛結婚」との関連は明確にみられた。

これらの分析結果からすると、「親は恋愛結婚」であることや「父親は都会出身」であることによって、「外向性」や「勤勉性」、「寛容性(反神経症傾向)」といった「向社会的」な性格特性が、選抜・強化され、世代間で相続されていると考えることができる。他方、「開放性」や「協調性」に関しては、親世代からの関連と、調査対象者たちの配偶者選択との関連の方向性(正負)が、必ずしも一致していなかった。

4. 考察

4.1. 「大都市」における「上昇婚志向」とその由来

これまでみてきたように、配偶者の社会経済的地位に対する女性の選り好み(上昇婚志向)は、男性に比べるとはるかに強い。また、「地方」よりも「大都市」においてその傾向は強い(表4)。しかしながら、それは、上野(1994)が言うような、女性の代理達成の願望に由来するものでもなければ、山田(1999)が言うような父親が提供している生活水準の維持を目的とするものではなかった。むしろ、それは「子どもに与えたい生活水準」(子どもへの投資意向)に由来するものであり、この点に関しては、前回調査の結論(高橋2024)を再確認することができた。今回の調査では、それに加えて、「大都市」ほど、「上昇婚志向」

と「子どもへの投資意向」が関連している点も明らかになった。

しかしながら、今回の分析では、女性の地域移動類型と上昇婚志向の関連（図 1）について、因果関係の向きを特定することができなかった。すなわち、「大都市」に移動した結果、「大都市」定住者と同様の「上昇婚志向」を持つようになったのか、それとも「上昇婚志向」の強い女性が、「地方」から「大都市」に移動しているのか、特定できなかった。ただし、「大都市」女性では、「結婚条件への自信度」（表 6）がかなり高いことを考えると、「上昇婚志向」の女性が都市流入し続けている側面が強いのではないかと考えられる。

4.2 「向社会性」をめぐる女性の選り好みとその地域差

ここまで本稿では、「向社会性」を明確に定義しないまま、「穏やかな性格」や「滅多に怒らない」、あるいは「ビッグファイブ得点」などの変数を用いて、「向社会性」の選り好みを指摘してきた。これらの「向社会性」に関する女性の選り好み傾向は明白ではあったものの、その地域差という点では、統計的な有意差が見られないものもあった。その原因としては、第 1 に、「穏やかな性格」や「協調性」の回答では、平均値がかなり高く、天井効果が発生していた点を指摘できる。このような結果自体、日本人における自己家畜化がかなり進んでいることの何よりの証拠かもしれないが、この点に関しては、使用する尺度などを変更して検討する必要があるだろう。

第 2 に、「結婚条件の重視度」や「ビッグファイブ得点」のような質問では、自分を振り返って、個人内で相対評価をしたり、身近な他者との比較で評価したりしているために、ふだん接触を持たない集団同士の比較には、適していない可能性も少なくない。

第 3 に、「大卒以上の学歴」や「顔が魅力的」、「清潔感」という選り好みにおいて、すでに一定の「向社会性」が先取りされている可能性も考えられる。「犬顔」のイケメンに惹かれるのも、「大卒以上の学歴」に惹かれるのも、それらが男性の「向社会性」に関する正直なシグナルであることを無意識のうちに理解しているからとも考えられる（高橋 2025a, 参照）。したがって、このような形態的・生理的・心理的・行動的といった次元の異なる形質について、選り好みがどのように関連しているのかを検討する必要があるだろう。

4.3 ビッグファイブ得点からみた「向社会性」の選り好みと 2 重相続

本稿において最も重要な知見は、男性における配偶者の有無と「ビッグファイブ得点」の関連を明らかにした点にある（図 3）。このことは、ダーウィンの性淘汰理論の予測どおり、人間においても、女性が選り好みを通じて、男性の形質を選択・変化させている可能性を示唆している。配偶者の有無によって、男性の「外向性」や「勤勉性」、「寛容性（反神経症傾向）」が大きく異なっているという事実は、社会学や心理学にとっても非常に重要なものであろう。また、「親の恋愛結婚」や「父親の出身値」も、調査協力者の「ビッグファイブ得点」に少なからず影響を与えていた。これらの事実は、都市を中心とした「向社会性」の 2 重相続が、現在でもなお継続している可能性を示唆する。

他方、「開放性」や「協調性」にみられるように、親から受けた文化的・遺伝的影響と配偶者選択における選り好みの方向性が、必ずしも一貫していないものもあった。もちろん、親世代では「開放性」が好まれていたのに、子世代では「開放性」を不誠実さの証として忌避されるように変化した可能性も考えられる。このことは、性淘汰としての「自己家畜化」が時間的・地域的にみてどの程度強い一貫性をもつのか、という問題を提起している。

5. まとめと課題

以上、本稿においては、配偶者選択のあり方を都市と地方で比較することを通じて、都市における「向社会性」の2重相続の可能性を検討してきた。これまで「都市化」として議論されてきた社会化や社会統制の圧力は、配偶者選択の局面においても強く作用し、それが「自己家畜化」という遺伝的・生理的变化を引き起こしているというのが、本稿の基本的主張である。

本稿での分析を通じて明らかになった知見は、繰り返しになるが、次のとおりである。

①「大都市」では、「地方」よりも女性の「上昇婚志向」が強い。ただし、この「上昇婚志向」は、出身家庭の生活水準の高さや社会的地位の代理達成願望から来るものではなく、「子どもに対する投資意向」を先取りするものである。

②女性の選り好みは、社会経済的地位に関する「上昇婚志向」だけでなく、「穏やかな性格」や「外向性」、「勤勉性」などの「向社会性」にも及んでいる。「地方」よりも「大都市」で「向社会性」が重視される傾向は見られたものの、方法論的問題も残った。

③結婚している男性では、結婚していない男性に比べ、「外向性」や「勤勉性」が高く、「神経症傾向」が低い。また、そうした「ビッグファイブ得点」は、男性でも女性でも、父親の出身地や親が恋愛結婚かどうかと関連していた。

これらの本稿の知見からすると、「3代住み続けなければ、本物の都会人にはなれない」といった言説は、たんに文化的習熟に要する時間的長さを指摘したものではなく、配偶者選択を介した遺伝的・生理的基盤の変化の必要性を指摘したものと考えられる。都市文化の「上品さ」は、遺伝的・生理的に「衝動性」を抑制されてはじめて、他者にて呈示できるようになる。ただし、<江戸っ子>や<博多っ子>のような、祭りやケンカが大好きな下町文化の淘汰圧は、本稿で指摘している「自己家畜化」と逆のベクトル—交感神経系の活発化—であったと推測される。

このような本稿での研究には、a 調査協力者が3都県の若者にすぎないことや、b 居住地の都市規模や居住歴との関連が自己報告であること、c 「向社会性」に関する回答のいくつかに天井効果が見られたことなど、調査データに由来する限界があることも確かである。また、d 配偶者選好の歴史的変容などの社会史研究を踏まえて議論する必要性もあるだろう。こうした点をきちんと検討し、「都市化」と「自己家畜化」の関連を明確にすることで、

「膨張し続ける都市」や「地球の持続可能性」という近現代の「暴走」を解くヒントが得られるのではないかと考えている。

[注]

- 1) 本稿では、人間の特質について客観的事実を検討することを主眼としており、「～すべきである」とか「～するのが正しい」と主張するつもりは全くない。異性に対する評価が遺伝子の自己複製という観点からなされているとする指摘は、そうした仮定を設けたほうが、人々の弾く「算盤」をうまく説明できるからであり、そこに政治的・道徳的含意はない。本稿では、「である」から「べきである」を導く自然主義的誤謬も、「べきである」から「である」を導く道徳主義的誤謬も、ともに回避しているつもりである。誤りがあればご指摘いただきたい。
- 2) 当時のヴィクトリア朝の男性主義的な性道徳の下で、ダーウィンの雄間競争の原理は広く支持された一方で、女性による選り好みの原理は、様々な批判を受けることになった (Prum 2017=2020:38-47)。また、メスの選り好みは審美的であり、必ずしも適応的とは言えない面もあるため、自然淘汰に関する過去のダーウィンの説明とも矛盾し、彼を困惑させた。
- 3) このような人間の「進化」や「遺伝」をめぐる議論は、「優生学」や「人種差別」、「帝国主義」などの社会問題に対する懸念から、第2次世界大戦後の社会科学においては、徹底して回避され、排除され続けてきた。たとえば、E.O.ウィルソンの『社会生物学』(1975)に対して R.C.ルウォンティンや S.J.グールドらが批判を展開した「社会生物学論争」などの批判を挙げることができる。ここでは、そうした論争について検討する余力はない。しかし、人間の遺伝的・生理的基盤について、個々人の資質の差がほとんどなく、配偶者選択(性淘汰)による影響もほとんど受けず、世代的にも何ら変化していないという奇妙な過程を支持し続けることが、社会科学的に「正しく」、「民主主義的」な態度なのかは、甚だ疑問である。
- 4) 「簡易版ビッグファイブ尺度」に関するそれぞれの質問文は、次のとおりである(数字は質問順、Rは逆転項目を示す)。「開放性」:⑤「新しいことが好きで、変わった考えを持つと思う」、⑩「発想力に欠けた、平凡な人間だと思う」R。「勤勉性」:③「しっかりしていて、自分に厳しいと思う」、⑧「だらしなく、うっかりしていると思う」R。「外向性」:①「活発で、外向的だと思う」、⑥「ひかえめで、おとなしいと思う」R。「協調性」:②「他人に不満を持ち、もめごとを起こしやすいと思う」R、⑦「人に気をつかう、やさしい人間だと思う」。「神経症傾向」:④「心配性で、うろたえやすいと思う」、⑨「冷静で、気分が安定していると思う」R。このうち「協調性」と「勤勉性」については年齢差が、「開放性」と「外向性」については、性差があることが大規模調査で確認されている(川本ほか 2015、参照)。ただし、出生コーホートや結婚による違いは検討されていない。
- 5) 「地方」の既婚女性にもみられる「向社会性」は、いったい誰が選択しているのかという問題は大変興味深い。というのも、少なくとも同年代の男性には、そうした選り好み傾向が見られないからである。井上(1991)は、戦前の女学校において、年配の女性(姑)たちが息子の花嫁探しに来ていたことを報告している。こうした事例を考えると、家父長制の下でも、配偶者選択の実態は、地域の女性集団によって担われていた可能性は少なくないだろう。

謝辞

この春に退職される横田尚俊先生には、山口大学での32年間の大部分を一緒に過ごさせていただいた。その柔和なお人柄と博識には、幾度となく助けられた。私が本稿で示し

たような、風変わりで、自由勝手な研究・教育を続けてこられたのも、他方で、横田先生が、オーソドックスで専門的な研究・教育を積み重ねてこられたからにはほかならない。

なお、本研究は、2023年度山口大学人文学部学部長裁量経費（地域連携プロジェクト：地方の若者における恋愛・結婚に対する意欲低下のメカニズム）に基づく研究成果の一部である。

[引用文献]

- Ando, J., Suzuki, A., Yamagata, S., Kijima, N., Maekawa, H., Ono, Y., & Jang, K. L. (2004). Genetic and Environmental Structure of Cloninger's Temperament and Character Dimensions. *Journal of Personality Disorders*, 18, 379–393.
- Boyd, R. and Richerson, P. J. (1985). *Culture and the Evolutionary Process*, The University of Chicago Press.
- Buss, DM. (1994). *The Evolution of Desire: Strategies of Human Mating*, Basic Books. (=2000 狩野秀之訳『男と女のだましあい』草思社).
- Darwin, C. (1871). *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*. John Murray. (=2016 長谷川真理子訳『人間の進化と性淘汰』講談社).
- Dugatkin, L.A., and Trut, L.(2017),*How to Build a Dog (And Build a Dog)*, University of Chicago Press. (=高里ひろ訳 2023『キツネを飼いならす』青土社)
- Hakim, C.(2011).*Honey Money: The Power of Erotic Capital*, Penguin Books.(=2012 田口未和訳『エロティック・キャピタル』共同通信社).
- Hare, B. and Woods, V. (2020), *Survival of the Friendliest*,Random House. (=2022 藤原多伽夫訳『人間は<家畜化>して進化した』白揚社)
- Henrich, J. (2015).*The Secret of Our Success*, Princeton Univ Pr. (=2019 今西康子訳『文化が人間を進化させた』白揚社)
- 井上章一.(1991).『美人論』リプロポート.
- 川本哲也・小塩真司・阿部晋吾・坪田祐基・平島太郎・伊藤大幸・谷伊織.(2015).「ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差」『発達心理学研究』26-2:107-122.
- 国連広報センター.(2020).「人口構成の変化」.
(https://www.unic.or.jp/activities/international_observances/un75/issue-briefs/shifting-demographics/ 最終アクセス 2025年1月31日).
- 厚生労働省.(2024).『人口動態調査』.
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html> 最終アクセス：2025年1月31日)
- Luhmann, N. (1982).*Liebe als Passion*, Suhrkamp. (=2005 佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛』木鐸社)
- Park, R. (1925). The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment. Park, R. & Burgess, E. eds. *The City*. The University of Chicago Press.
- Prum, R.O. (2017). *The Evolution of Beauty: How Darwin's Forgotten Theory of Mate Choice Shapes the Animal World - and Us*, Doubleday.(=2020 黒沢令子訳『美の進化—性淘汰は人間と動物をどう変えたか』白揚社).
- 三浦麻子・小林哲郎.(2015).「オンライン調査モニタの Satisfice に関する実験的研究」『社会心理学研究』

31-1:1-12.

- Simmel, G. (1911). *Die Koketterie*, *Philosophische Kultur*, Kröner. (=2004 居安正訳「コケットリ」『社会学の根本問題』世界思想社)
- Sombart, W. (1912). *Liebe, Luxus und Kapitalismus*, Deutscher Taschenbuch Verlag. (=2000 金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』講談社学術文庫)
- 鈴木広訳編. (1965). 『都市化の社会学』誠信書房.
- 鈴木尚. (1985). 『骨は語る 徳川将軍・大名家のひびと』東京大学出版会、1985
- 高橋征仁. (2024). 「シャインマスカット効果—都市化やマッチングアプリが婚活にもたらす光と影」. 『やまぐち地域社会研究』 21:37-52
- 高橋征仁. (2025a). 「イケメンを科学する—〈やさしさ〉のリバース・エンジニアリングとしての配偶者選好」『異文化研究』 19: 1-12.
- 高橋征仁. (2025b). 「地方の若者にとっての〈結婚難〉とは何か？」『山科学研究』 5 (頁数未定).
- 上野千鶴子. (1994). 『マザコン少年の末路』.河合ブックレット.
- Wrangham, R. (2019) *The Goodness Paradox: The Strange Relationship Between Virtue and Violence in Human Evolution*. New York: Vintage. (=2020 依田卓巳訳『善と悪のパラドックス』NTT出版).
- Wilkins, AS. (2017). *Making Faces: The Evolutionary Origins of the Human Face*. Belknap Press.
- Wilkins, A.S., Wrangham, R.W., Fitch, W.T., 2014, The “Domestication Syndrome” in Mammals: a Unified Explanation Based on Neural Crest Cell Behavior and Genetics. *Genetics* 197(3): 795-808.
- Wilson E.O. (1975) *Sociobiology*, Belknap Press. (=伊藤嘉昭監訳『社会生物学』,新思索社)
- 山田昌弘. (1999). 『パラサイトシングルの時代』.ちくま新書.
- Zuk M. (2013) *PALEOFANTASY: What Evolution Really Tells Us about Sex, Diet, and How We Live*. W. W. Norton. (=2015 渡会圭子訳『私たちは今でも進化しているのか?』文藝春秋)

所属：山口大学人文学部

E-mail アドレス：takahasi@yamaguchi-u.ac.jp